

2025年12月 1日

退職教職員協議会双葉支部会員のみなさま

福島県退職教職員協議会

双葉支部 事務局

退教協双葉支部「退教協ニュースNo.420号」 の送付にあたって

年の瀬を迎え、何かとあわただしい時期となりました。11月22日、23日には、浪江町で「十日市」が行われました。震災後、二本松市や町内のスポーツセンターで開催されてきましたが、本来の会場である「新町通り」での開催は震災後初めてです。たくさんの人でにぎわっていたという報道もあり、少しずつ、そして着実に、かつてのにぎわいと、新しい町づくりを感じることができます。

それにしても

・・・

高市内閣の高い支持率を追い風に、少数与党から脱却すべく年明けには解散総選挙がうわさされ始めています。

周辺 事態

しかし、「台湾有事」に関連した国会答弁により、中国との関係を損なうこととなってしまいました。東アジア各国は、常に日本の首相の言動を注視しています。あの安倍首相でさえ、首相退任後には台湾有事について発言したものの、首相在任時には控えていました。早くも高市内閣の危うさが浮き彫りになりました。

核

さらに、高市内閣では「非核三原則」についての見直しの協議がされるようです。昨年「ノーベル平和賞」を受賞した「日本原水爆被害者団体協議会（被団協）」は抗議をしています。そして、新潟県の花角知事が11月21日に、柏崎刈羽原発の6・7号炉の再稼働を了解すると表明しました。いまだに避難を強いられている私たちの思いはどこに届いているのでしょうか。

万が一、解散総選挙になったとしても、政治のカネの問題に背を向け、企業・団体献金を継続し、さらに憲法改悪や防衛費増額などを進めようとする現体制には「No!」の意思を示さなくてはなりません。

各地区交流会を 開催しました!

退教協・あけぼの会の双葉支部会員の他、地元支部長さんや現役組合員さんも含め、延べ30名の参加が

福島会場	7名
郡山会場	4名
会津会場	5名
相双会場	7名
いわき会場	7名

ありました。会員のみなさんそれぞれのスケジュール調整の他、交通手段や体調などの理由から、参加者は決して多くはありませんでした。しかし、今後の継続の見通しを持つことができました。交流会の詳しいことについては、次号（新年号）でお知らせしたいと思います。

12月2日から「紙」の保険証は使用できなくなります!

考えられるケースは以下の通りだけです! だから心配しないでください!

マイナンバーカード（マイナ保険証）の所持の有無	医療機関等に持参するもの
(1) マイナ保険証登録済みの人	マイナンバーカードだけ
(2) マイナンバーカードを持っていてマイナ保険証未登録の人	資格確認書 ※形式は以下の4種類 ①カード、②はがき、
(3) マイナンバーカードを持っていない人	③A4版のもの、④スマホの画面

医療機関等によって対応が異なるという情報もありますが、マイナ保険証がなくても「資格確認書」を提示することにより、これまでの「紙の保険証」と同様に医療機関を利用することができます。その場での手続き、操作等については、医療機関の職員に遠慮せずに聞いてください。

原稿をお待ち
しています



近況報告、または昔の思い出、さらには現職時代の写真など、提供をよろしくお願いします。短歌や俳句なども大歓迎です。メモ的なものでもどうぞ。

○ 住所等の変更及び会報の原稿は、下記の連絡先までお願いいたします。

○ 連絡先 (事務局長) 柴口正武 宅

〒976-0036 相馬市馬場野字寺内175-5

※ 電話は 090-2604-8941

※ ファックスは 024-522-7751

(弘済会福島支部/柴口勤務先)

※ 電子メールは shibaguchi0211@gmail.com



2025年12月 1日

第420号

退教協 ニュース

ーシリーズ「ああ、懐かしき 双葉高等学校硬式野球部」(その3)ー

第一章 憧れ(2) ～ 第二章 現実と苦悩

いわき市(大熊町) 高野正美

(前回までのあらすじ) 双葉高校の甲子園をかけた決勝戦を観に行き、その勝利を目の当りにした高野さんは、野球への憧れ、情熱を胸に双葉中野球部に入部。最後の中体連。優勝候補の浪江中と対戦となりましたが、体格的に勝る浪江中野球部員を見て弱気になってしまいました。

だが、蓋を開けてみれば、我が双葉中のエース橋本は、相手打者へのアウトコース低めへのコントロールが冴え、浪江中打線を0点に抑えていた。双葉中は、天野のタイムリーヒットで1点を先取し、1対0で最終回を迎えた。

八	九	十	計
0	0		1
0			0

ツーアウトランナー3塁。後一つアウトを取れば、優勝候補の浪江中に勝利することができる。相手バッターは180センチを超えるサード伊藤(後に高校でチームメイトとなる)。

よし、後アウト一つ。と思った瞬間、伊藤の打球はサードの俺のところへ飛んできた。地を這うような打球というのはこんな打球を言うのだろう。

瞬間的に俺は、練習試合の対富岡二中の4番、五十嵐の打球を思い出した。あの時は、グラブを地面より少しだけ上げたその下を通り抜けてエラーしたのだ。

そこで俺は、「今度こそ捕るぞ」とばかりに、グラブを地面に近づけた。

しかし、ボールはグラブを掠^{かす}め、後ろに転がっていった。土壇場で1点を取られ同点。その後、盗塁、ヒットでもう1点を取られ逆転を喫し、目の前の勝利を逃してしまった。

俺さえ捕っていれば勝っている試合だった。

試合後、エース橋本に、天野に、チームメイトに、そして木幡監督に謝っ



た。みんなは、「気にすんな」「仕方ねえよ」と言ってくれたが、会場の富岡二中から夜ノ森駅までの間、涙が止まらなかった。



悔しい。この気持ちがいっまでも頭から離れず、この悔しさを高校野球にぶつけよう、そう再度決心した。

第二章 現実と苦悩

双葉高校硬式野球部に入部したのは、昭和51年4月。保育所からの同級生の川見と一緒にだった。高校の合格発表を川見と見に行ったときに、「入学式終わってから入部すっぺ。」

と、約束したのだ。

だから、春休みはのんびりと過ごした。

時々、双高グラウンドに練習を見に行くと、すでに新1年生らしき二人が参加していた。



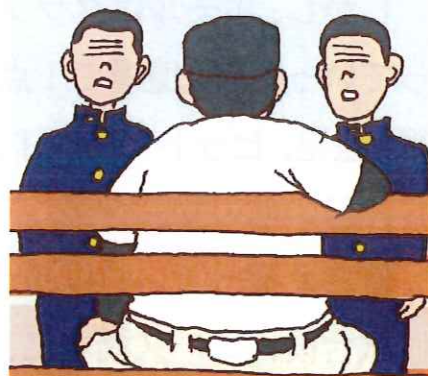
ユニフォームの後ろを見ると、一人は「熊田」

と書いてあった。間違いなく、新1年生である。俺も入部したら、「熊田」という人と一緒に野球をやるんだろうなと思いながらも名前のない2年生や3年生の中にいると、体が大きく見えて、同級生でありながらも俺たちの先輩のように見えた。

ま、でも俺は入学式が済んでから入ることになっていたもので、それまでは双中野球部の同級生たち数名で毎日交換でそれぞれの家を訪ね、簡単なお別れパーティーなるものを行って楽しんでいた。

入学式の次の日、俺と川見と二人でグラウンド内のベンチにどっかりと座っている監督らしき人に、ドキドキしながら入部のお願いをした。

「明日から、ユニフォームに名前を書いて参加するように。」

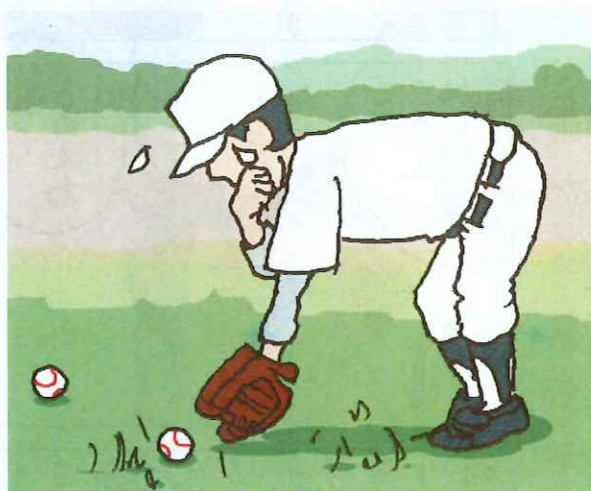


と言われ、その日は練習に参加することなく家に帰った。その日の夜、準備していたユニフォームの後ろに『高野』と大きく書いた。



次の日、練習前にみんなの前で、
「高野正美です。よろしくお願いします。」
と、心臓が飛び出るほど緊張しながら挨拶を
して周りを見回すと、双葉中出身の一つ上の
先輩の安井さんと、二つ上の先輩の渡邊さん

がいて、少しホッとした気持ちになった。みんなニコニコしながらいてくれたので、優しい人ばかりなんだと思い安心した。ただそれは、1日目だけのご褒美みたいなものだった。



入部1日目から、夜8時過ぎまでの
練習。これまで何のトレーニングもし
ていなかった体はへとへとだった。

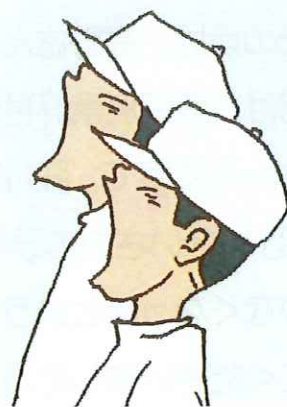
春休み中、遊びほうけていた体は、
ただの球拾いだけなのに、疲れて疲れて、
1日目から根を上げた。

新1年生は、春休みから参加していた二人に、俺と川見、他10名ほどの
新入部員がいた。練習は、連日夜8時、9時まで続き、疲労が溜まってきた。
中には、疲労骨折だの家庭の事情だのという理由で、一人また一人と辞めて
いった。自分自身も、1週間も経つと体中が筋肉痛となり、歩くのさえ辛い
状態になってきた。おまけに2年生からは、

「練習中、声が出てねえ。」

と、練習後に連日の声出し。「さあ行こうぜ」等
の声を何十回も連呼。挨拶の声が小さいと、「お
はようございます」「ありがとうございます」「さ
よならっす」と、挨拶の練習。2、3日もすると、
声が枯れて出なくなってしまった。

地区別生徒会の会合で、3年生の地区会長か



ら名前を呼ばれた時には、「はい」という声がかす掠れて、言葉にならないでいると、

「あっ、野球部ね。しょうがねえなあ。」
と、許してもらったりもした。

それでも、2年生からの声出しの指導は続き、声が途切れたり、小さかったりすると、練習後は決まって声出しや腹に力が入っていないからだというので腹筋を鍛えるためのしごき。何でこんなことをしなければいけないだと思いながらも、耐えるしかなかった。

いくら鉄拳制裁があろうとも、とても両親に言えたものではない。万が一に言ったことによって、「そんな部活辞めてしまえ」とか、「監督に言ってやっから」とかになってしまったら、先輩たちにも同級生たちにも学校にも迷惑をかけてしまうと考えたからだ。

.....
(事務局より) 文中のイラストで、双葉中学校や双葉高校の野球部のユニフォーム等は、完全に予想です。実際には異なると思います。その点は、高野さんお許してください。

次号は、鹿児島県肝付町教育長である木村政文さんの文章で、肝付町広報に掲載される「年頭」のあいさつの原稿を掲載します。(原稿が少なくなったという会報をご覧になり、送っていただきました。)

あれ、それ、誰?

by Monster 松

